

卷頭言

修復落慶式を迎えて

菅野 憲道



大震災以来一年四ヶ月、源立寺の修復事業もようやく落慶式を迎えました。寺観も一新し、立派に道場を荘厳することができました。これひとえに仏祖三宝の御威光はもとより、檀信徒が心を一つにして御報恩の道に精進されたたまもの心より御祝い申し上げます。

さて三宝の恩を報ずることは、『四恩抄』にも、

「されば三宝の恩を報じ給うべし、古の聖人、雪山童子・常啼菩薩・薬王大士・普明王等、これらは皆我が身を鬼のうちかひとなし、身の血髓をしほり臂をたき頭を捨て給いき。然るに末代の凡夫、三宝の恩を蒙りて三宝の恩を報せず、いかにして仏道を成ずべけんや」

とあって、仏道の肝要は知恩報恩にあることは、初信の者でも知っているのですが、いざ現実になると、徳薄垢重の凡夫の悲しさ、命が惜しい・身が惜しい・財がもったいない、時間をもったないと、口先ばかり、観念ばかりでなかなか実践できません。無益なことには浪費しても、仏法のためにはなかなかできないのであります。

しかしながらこのたびは、本門の三大秘法の大御本尊を安置する戒壇莊嚴のために、汗水たらして蓄えた財物を喜んで供養され、報恩の一分に供えられたのであります。それが結実して本日の落慶式となったのでありますから、如法まことにおめでたく存じます。

この上は当山が、本門の下種三宝尊が安住ましまして、事の寂光土・本有常住の霊場となり、末法万年未来までも常住不退に順縁逆縁の利益をおよぼし、一切衆生の現当二世の大願成就の道場たらしむべく、僧俗和合・寺檀一致してさらに精進しようではありませんか。

源立寺修復の完成にあたって

源立寺法華講頭 尾 林 弘 三



ります。

住職の意を受けて設けられた修復委員会で、募財や工事内容の検討を進めてまいりました。講中の皆さまには、様々な被害を受けられ大変な中、しかも不況が長引く時に募財の趣意書に対して、御本尊安置の道場の修復のために、無二の志こころざしをもって御供養くださいされ、当初の

予定を上回る修復費用が調達できました。

これによって、本堂・庫裡・山門・トイレの改修等の修理が出来る目処めどが立ちました。

本堂の屋根の工事を行った石野瓦工業には、被災後いち早く屋根の被害状況・補修方法を調査報告していただき、後々のことを考えて飛鳥瓦の最高級のものを使って、施工することをお願いし、本堂に立派に完成しました。

昨年の第二十五回総会は、本堂の屋根

の補修が出来たところで行われ、十一月の南近畿法華講大会も、源立寺で開かれることになっておりましたが、トイレの基礎工事に入ると、突如宗門側より工事続行禁止、現状回復を求める訴えを起こされて、工事は一時中断することになりました。

大阪地方裁判所で、四回の審尋が開かれ、結局自分たちの不利を覚った宗門側が、提訴を取り下げ終了しましたが、南近畿法華講の皆様には、大変ご迷惑をおかけいたしました。

この中断のため、工事が遅れて境内の整備が一部残っておりますが、本日で一区切りをつけ修復法要を致します。

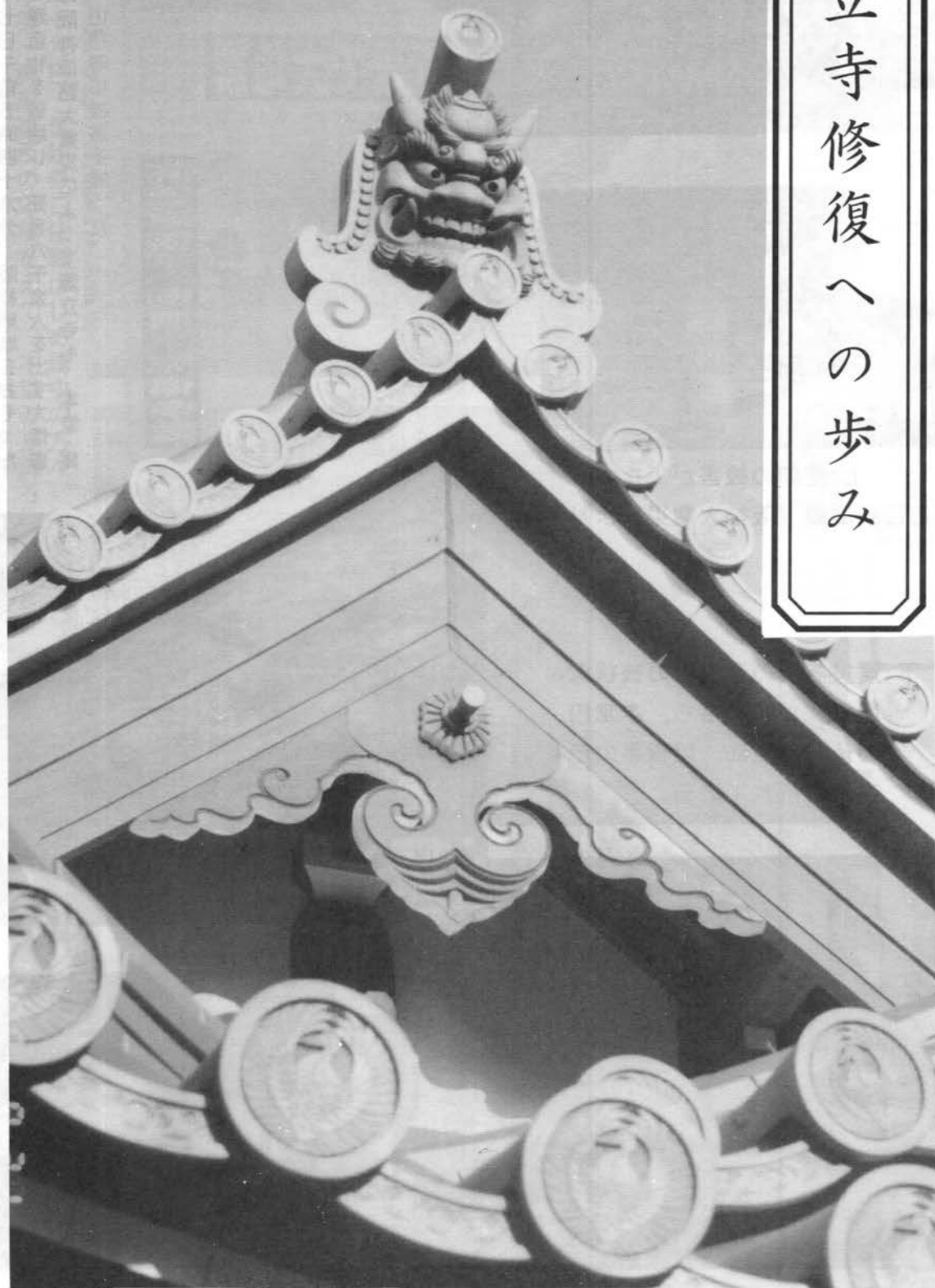
今般の震災に伴う源立寺の修復事業には、檀信徒の皆様の特別の御供養と、他寺院のご僧侶方をはじめ、講中寺族の見舞金、正信会義援金等の浄信の志により修復費用が調達できて成し得ることが出来ました。

立派に修復なった道場を中心に、講中が一層の信心に精進することを誓い申し上げます。修復事業完了のお礼の言葉とさせていただきます。

阪神大震災で被災した源立寺が、斯くも立派に修復が出来まして、本日修復記念法要を執り行うことが出来ますことは、誠にありがたく修復委員を代表して、皆様に御礼申し上げます。

この度の修復工事をめぐって、宗門側から工事妨害と思われる提訴問題で、約四カ月間の工事中断があったにもかかわらず、このように早く修復を完了するところが出来ましたのは、偏えに菅野住職の修復に全力を注がれた熱意と行動力にあ

源立寺修復への歩み



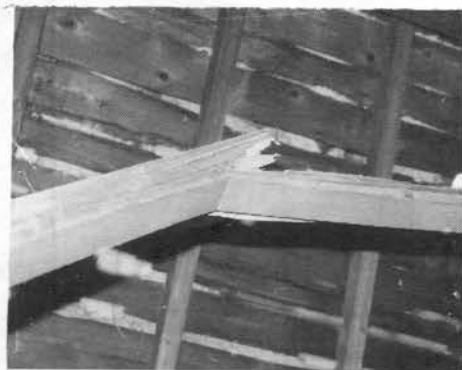
阪神地域を大震災襲う

平成七年一月十七日午前五時四十六分、阪神地域をおそった大地震は、多くの建造物を破壊し、死者六千余人を出す大惨事となったが、この阪神淡路大震災によって源立寺も、本堂・庫裡屋根、三師塔、山門等に被害を被った。



上:空前の被害がでた
(毎日新聞編『阪神大震災』より)

下:震災直後の源立寺の被災状況。
屋根瓦がずれ落ち、本堂内の仏具は散乱、屋根裏の筋^{すじ}交いも折れている。



平成七年一月



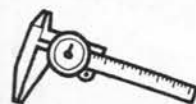
一月二十九日、普妙寺ご住職はじめ講中の方々、門真布教所の岡本師・興風談所の応援をえて、本堂の瓦降ろし・防水シート掛け・倒壊した三師塔の修復などが、夕方まで行われた



住職もヘルメット姿で…



三
月



お講日・春季彼岸会を中
心に行われた特別御供養



地震災害の復旧を手伝って

北村忠雄

平成七年一月二十九日、地震発生より十二日目である。晴天なり。時間は午前九時頃、余りの寒さなし。羽曳野普妙寺の石川住職以下多数の講中の方々が応援に駆けつけて下さる。源立寺講中と一緒にになり、崩れた瓦の片付けを開始。

この日私は、思いがけず住職の指示により、梅本さん等とともに本堂の天井裏へ入る事になる。本堂の中の押入の天井板を一部剥がし、鼠小僧のように本堂の天井裏へ潜り込む。内部は暗く大屋根の野地板の隙間より幾筋かの光の矢が差し込む。だが状況は惨憺たり。黄色と黒の粉塵が渦を巻き、小さな修羅界であり、戦場である。上から落ちる土埃と黒色の煤が混じり合い充滿している。

天井の中で幾らか時間が経つと、眼が闇になれて天井裏の全体の様子が判った。私が足場として利用する梁だけ大きく頑丈だ。梁から大屋根へ向って立つ束は細く支えとしては貧弱そのものである。あとはガランとした空間と広さだけ、これでよく重い屋根を受け止め支えていたものだと思いきながら感心もする。

正常に呼吸ができない、急ぎタオルで鼻と口を覆う。箒と塵取りを使い落ちて溜まった土埃を掃き寄せ集めて、本堂の大屋根に一部開けた所から回収した土を外へ送り出す。天井裏には五・六名が同じように働いていたと思う。梁の上を伝い歩き落ちないように中腰の作業である。その間、瓦が取り除かれた本堂の大屋根の野地板の隙間から砕けた土くれが、バラバラと落下して天井に積もり、その重さに天井

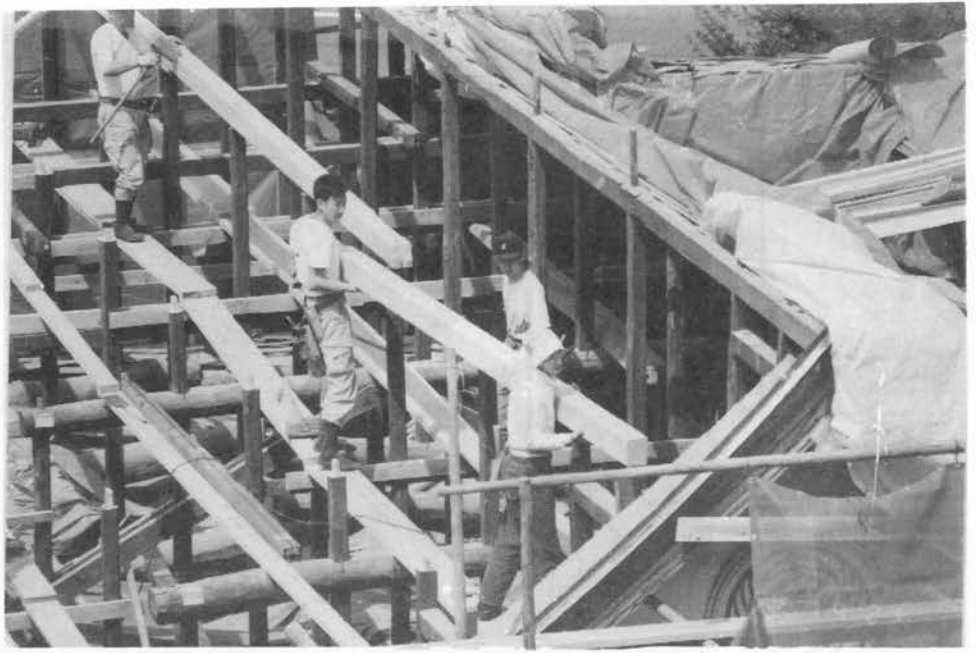
二
月



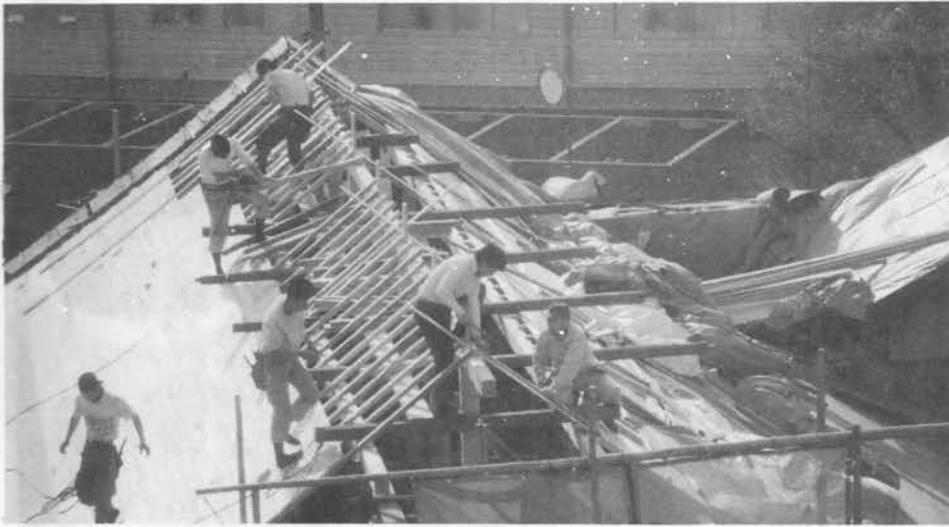
業者による瓦降ろし
から、本格的な修復
工事が始まった(二四日)



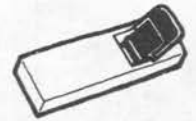
平成七年一月



本堂小屋組の木工事も始まった
この頃、たびたびの雨に悩まされた
(一七回)



四
月



は軋む。早く土を取り除きたいのだが、直接天井へ降りることは危険である。
外の大屋根では、普妙寺の住職が先頭に立ち講中の皆さんを指示し、崩れた瓦の撤去作業が続けられている。ダンプに投げ込まれる瓦を、上方より下へ滑り降ろす音が大きい。
際限なく降る泥の雨は、黄河流域の砂塵の如し。何度か外に出て、深呼吸をする。実に空気がうまい。胸の息苦しさが和らぐ。既に運び出された土埃が、いつの間にか小山になっている。
失敗もあった。梁の上を歩くのに張り巡らせてい



作業中の北村さん

る電線が邪魔なので、電線の使用の有無を聞くと、誰かの「使っていない」との返事があったので、私達は電線を各所で寸断して、歩き易さと安全を確保した。だが、これが失敗であった。後で判った事だが、この電線は使用中のものもあり、電気が点かない箇所ができてしまったのである。ために後日、梅本さんと二人で再び天井へ入り、修理をする羽目になってしまった。
天井裏で鼠の舞をしたお陰で、二・三日病院へ通うなどということもありましたが、今では行雲の彼方へ流れ去って消えました。二度とこのような災害がないことを願います。
(蜚池地区)

五
月

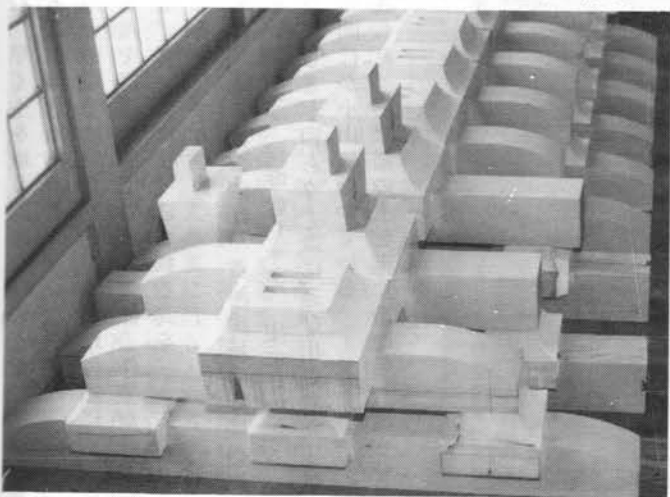


寺院建築の専門家
によって工事は進
められていった

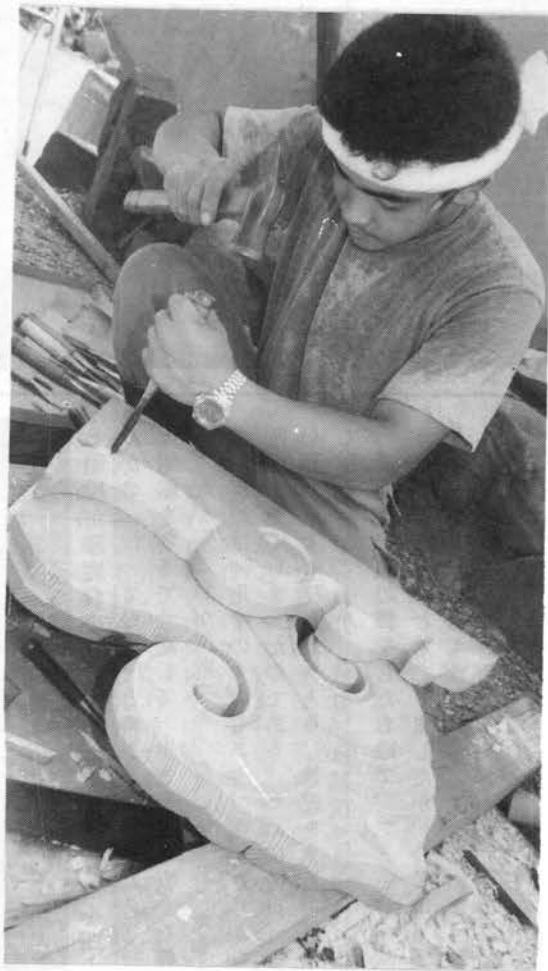


陣頭指揮をする錦戸棟梁

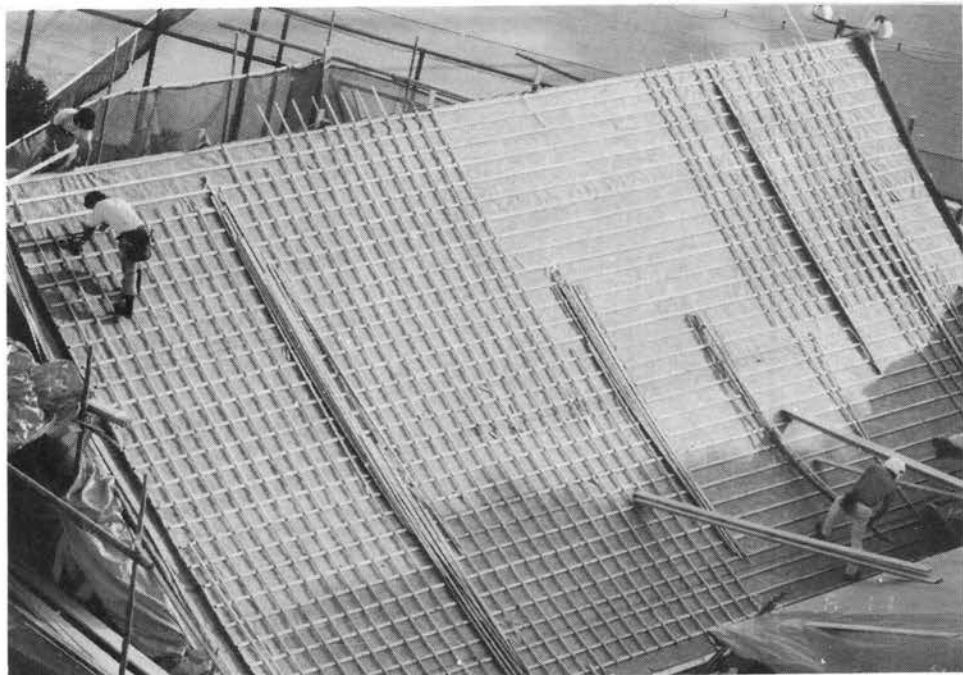
搬入された虹梁の肘木



懸魚を彫る職人さん



六
月



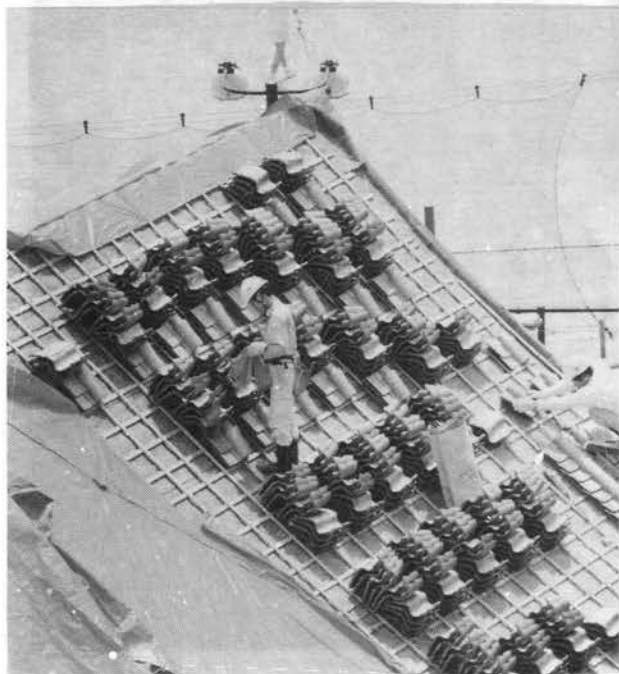
本堂屋根の棧木打ちが始まる(11日)



本堂の屋根瓦地葺きも始まった(30日)



本堂内の天井の工事が始まった(14日)
写真は、天井を取り外した本堂の屋根裏
本堂内の天井は、寺院建築にふさわしい
「格天井ごうてんじょう」になった





真新しい本堂で開催された「本堂修復記念法要
並びに第二十五回源立寺法華講総会」(16日)

応援に駆けつけた千葉蓮生寺
檀徒の小林さん(6日~13日)



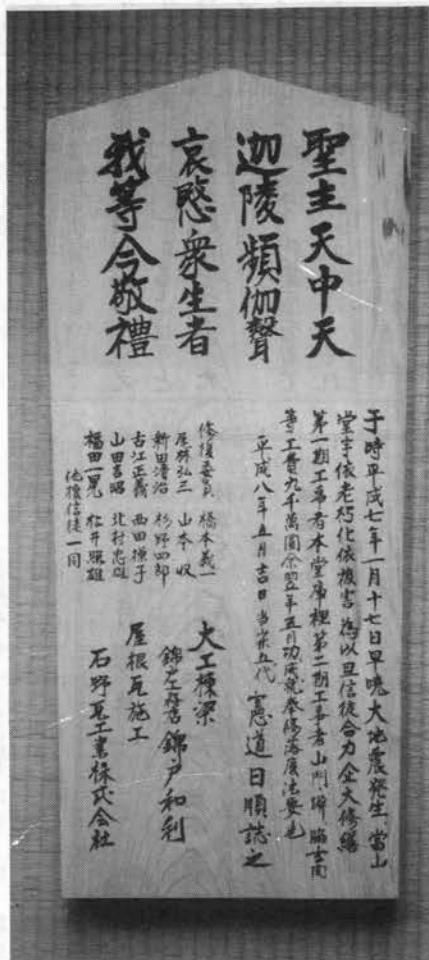
大鬼瓦が搬入された(19日)





庫裡の工事も最終段階に(5日完了)

本堂棟札の後面



修復こぼれ話

瓦葺きにあたった石野瓦工業は、東大寺や姫路城など国宝級の建造物の屋根修復なども手がけてきた日本でも有数の瓦メーカーである。ところで、同社が大仏殿の昭和の大修理に参加した際に、元請の清水建設の総監督として第二期工事に携わったのが伊藤善三さん(槻木地区)。伊藤さんはその後日建設計にうつり構造設計のエキスパートとして活躍されておられ、源立寺本堂修復中にはしばしば、現場を視察して、アドバイスした。はからずも最高水準の技術が修復工事にそそがれたことになる。

また、つねまつ印刷社・入江ステンレス加工・福田春光堂・その他多くの皆さんからも資材や施工などを無償で奉仕いただいた。

平成七年一月十七日午前五時四十六分、枕元の目覚まし時計が棚から落ち、物に当たり鳴り続けた。押し入れからもバイクのヘルメットが頭の上に落ちてきた。ドーンというすごい音と同時に、まるで飛行機がエアポケットに入ったような感覚が体をゆらした。私は頭から布団をかぶった。家の前には公園があるが、外へ出るとかえって危ないと思いい外には出なかった。



今までの人生の中で、これ程自然の恐ろし

さを見せつけられたのは、これが始めてである。しばらくして、明るくなってから外に出て、近所の人と話をしたが、その中には関東大震災よりひどかったという人もいた。

自分は源立寺はどうなっているかと思い、電話をかけたがつながらなかった。その数日後、青年部から連絡が入り、源立寺の破損した屋根の瓦降ろしを手伝ってほしい、とのことであった。

青年部とはいえ、日頃何の取り柄もない自分だが、とにかく父と一緒に源立寺に向った。ある程度予想はしていたが、矢張り源立寺も例外ではなく、瓦屋根はかなり崩れていた。

日頃下から見る屋根は、それ程高くは見えなかったが、いざ屋根に登ってみると意外と高く、又勾配もきつく足が竦むほどであった。「くろうさんです。」

黄色いヘルメットをかぶり、作業服を着て作業している方から声をかけられたが、それ

「震災がおいていった物」

青山 茂

はなんとご住職であった。

ご住職自ら屋根に上り作業をする姿を見て、自分は改めてご住職のご心慮の深さにあつく心を打たれ、そして自分も源立寺の檀徒として〈身の御供養〉をさせていただけたことに、言葉では表現できない喜びを感じました。本当に信心をしていて良かったと思い、深く御本尊様に頭を下げ、掌を合わせ唱題しました。これによりまたひとつ、自分自身の信心を高めていきたいと思っております。

最後に、この震災でお亡くなりになられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げ、私の感想とさせていただきます。(青年部)

【皐月詠草】



陸軍を 真向かい糺す (橋本 義一) 人ありき

昭和初期の 日本の議会は

鉢植えの 木瓜枯れたると 思いしに

明日へ誘う 蕾ふっくら

葬送の 自由の会に (橋本 円子) 入りし娘ら

珊瑚礁に母の 遺骨流しぬ

子鼠を いたぶる猫の 得意顔

そのむごき性 人間も持ち居り

人間を 調味料と 観るならば

交りてぞ識る 人の醍醐味

道問へば 少女の白き 指先に (坂本 フミ子)

菜の花風に 光りて揺るる

葉がぐれに 遅れ咲きたる 紫木蓮

五月の風に 彩深めゆく

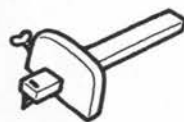
【恵日俳壇】

春雨や 香りも濡れる (山田 絢子) 沈丁花

うぐいすの 初音届けし まくら辺に

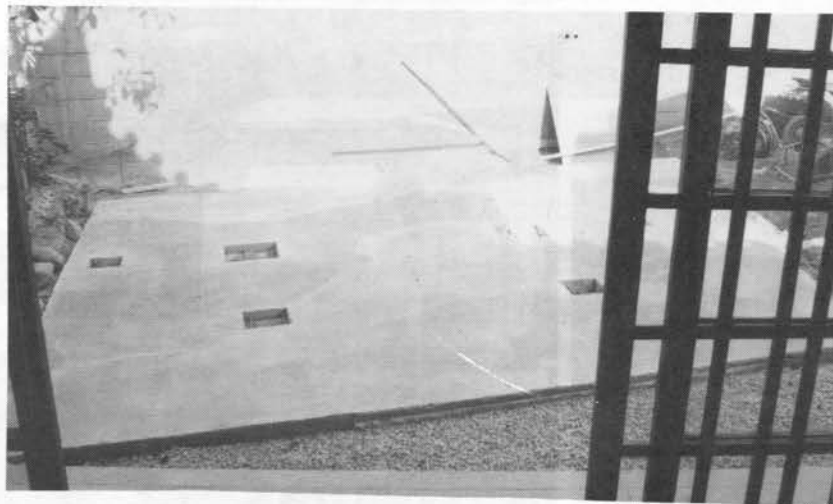
九月〜十二月

山門の解体(九月)



順調に進められていた工事であったが、宗門側寺院の妨害により中断せざるを得なかった

山門の基礎は出来上がっていた(九月)



仮処分裁判メモ(工事中断のこと)

第二期工事に入った九月二十七日、源立寺代表役員を自称する佐藤慈暢(豊中本教寺住職)が、突如、工事続行禁止等の仮処分申請の提訴に及んできた。

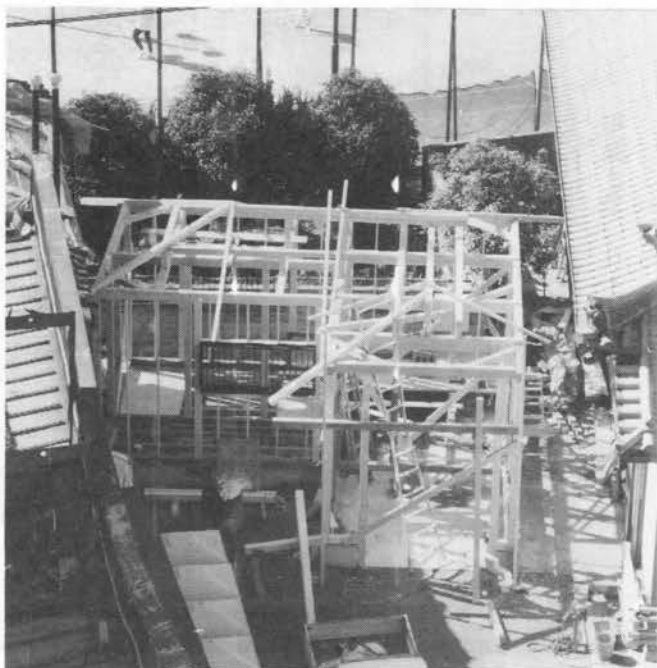
裁判は、大阪地裁民事部で裁判官をはさみ、当事者、代理人が出席の上、十月四日、十三日二十七日、十一月十日の四回の審尋が開かれ、終始当方が優位に進められていた。そこで、不利を覚った宗門側は、一方的に訴訟を取り下げ実質的当方が全面勝訴した形となった。

それにしても、震災で修復中の工事を妨害するためものと思えない提訴に、非人道的な体質を見た思いがした事件であった。



平成八年一月〜五月

宗門側の妨害によって遅れていた第二期工事
(山門・トイレ・寿工務店・塀・新田本店)が年
明け早々から再開された





上:修復なった源立寺

下:修復前の源立寺(平成三年頃)



源立寺の修復工事を記録して

木村 春夫

平成七年一月十七日の大地震によって、関西に至る所で大被害を受けました。

源立寺もこの大地震で屋根の瓦がずれるなどかなりの被害があったのですが、菅野ご住職は講中の方々の被害状況調べに車を毎日走らせて、激励を続けておられましたので、源立寺の修復工事は後回しになっていました。

その当時私は、昨年の暮れより風邪で咳がなかなか止まらないうえに、自治会の会長に、府の住宅課へ提出する地震被害の状況写真を撮ってほしいと頼まれ、無理をしたのがたたり、三十九度の高熱が続くこともできない状態でした。やっと娘に電話をして、娘の同級生のご主人の医師に、診療後に来ていただき、下熱と痛み止めの点滴を受け、咳はまだ止まらないものの、ようやく歩くことができるようになりました。

そんな状態ででしたが、一月二十九日には、普妙寺の石川ご住職始め、講中の方々が応援に来られることを聞いていましたので、咳とマスクはカメラを持って源立寺へ向ってました。

ご住職は心配されて、無理をするなど言われましたが、ゴホンゴホンとしながらも、なんと夕方五時頃までシャッターを押し続けることが出来ました。

その時の写真は、お礼の手紙と共に普妙寺と門真布教所へ送りましたが、後で写真を有り難うといわれ、ホッとしました。

二月末より、業者による本格的な修復工事が始まり、記録係としての私も忙しくなっ



修復を記録した木村さん

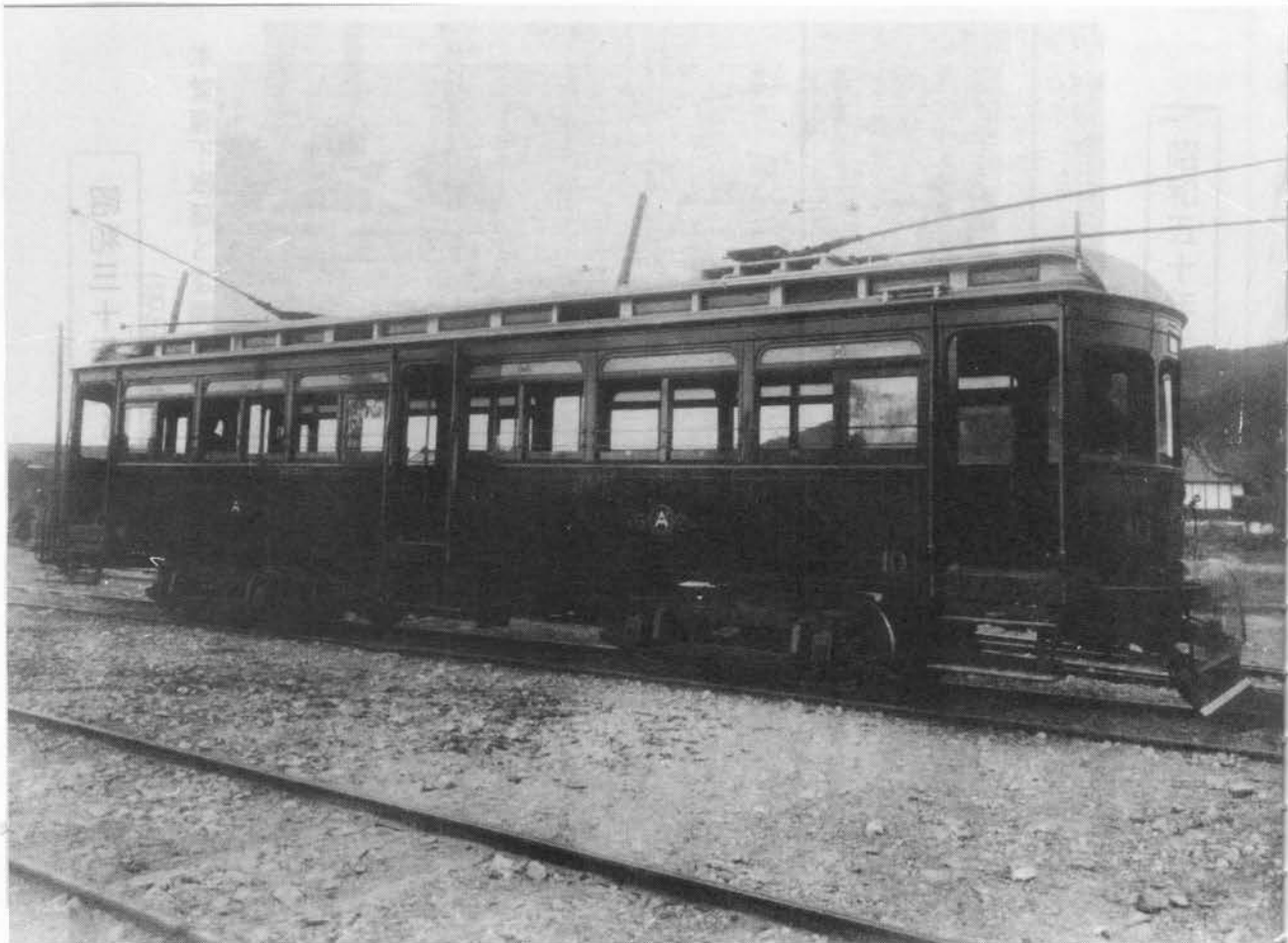
きました。この間三月一日・二日には、クレーン車が入ったの本堂北側屋根の瓦や土降りしを、向かいの九階マンションの屋上から撮りました。マンションの社長が虫辺さんと近所の方で、しっかり撮りなさいと激励されましたので、お礼に興味の盆栽を手入れしている姿を引き伸ばしてプレゼントし、喜んでいただきました。

格好の撮影ポイントであった、日宝マンションの管理人さんにも、立派に仕上がる姿をしっかり撮りなさい、と激励していただき、助かりました。

私がいつも思っているのは、すべての人との出会いは、ご本尊様のお計らいだということです。亡き平井さんのお陰で、記録係となりましたが、今回の修復工事でも、瓦の山本さん、大工の錦戸さんからも、今後の資料としたいので、仕事の内容記録のため、アルバムを作ってほしいと頼まれ、帰宅後夜遅く迄作成したり、時には朝早く起きて作成しましたが、苦になりませんでした。かつて和田のおばあさんから「すべてご本尊様のお使いとして、源立寺のため頑張るのです」と言われたことを思い出しては唱題に励み、毎日のように完成に向う状況を撮るのが、私に与えられた使命として、源立寺へ伺いました。

クレーン車まで入ったのがかなりな瓦や土降りし、本堂屋根の組立の材料上げ、瓦仕上げ、大工一族の丁寧な仕事ぶりなどを、夕方遅く迄撮って上げられる喜びを、平井さんに報告する御祈念は楽しみでもありました。源立寺修復の完成への記録を無事出来る事を楽しみに、唱題に励み源立寺に向う毎日です。

震災の 完成めざす 姿撮る
私の大きな使命です。 (服部地区)



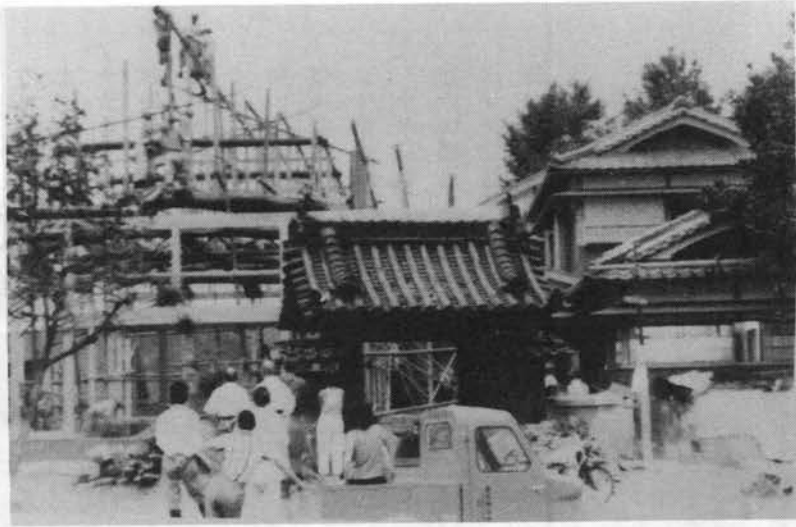
源立寺今昔

上の写真は、明治期のもの。阪急創業の頃の資料として本社に残っていた貴重な写真で、右端に見えるのが源立寺。当時源立寺の裏は操車場であった。

左は、大正初期の源立寺山門。



昭和三十年代



昭和三十七年に再建された本堂の建築風景と落慶法要(左、高玉住職と山田光太郎総代)



下:正信覚醒運動が始まった頃(向島住職時代)



昭和五十年代



本堂廊下増築と玄関改修の工事風景
(昭和五十五年十月)

昭和六十年、御宝前の
御宮殿が新しくなった



住職の指揮のもと、御影
様を新御宮殿に御遷座



恵日だより



法華講入講式

四月七日(日) 午前十時

四月七日法華講入講式が行われた。

今年の入講者は五世帯(別掲)で、午前十時より読経唱題の後、北村幹事の司会で、

- ① 歓迎の辞(松井照雄)
- ② 入講者挨拶(多田信也)
- ③ 法華講について(橋本義一)
- ④ 講籍係より(北村忠雄)
- ⑤ 会計係より(太田勲)
- ⑥ 新入講者紹介及び講員証授与

(尾林弘三講頭)

⑦ 住職指導

と進み、題目三唱の後記念撮影をもって終了した。

入講者を代表して挨拶された、豊中市在住の多田信也さんは、自身に立ちはだかる困難を克服していく過程で、大聖人様の信仰にいたった経緯を話され、今後の決意を述べられた。

式が終了すると、本堂のあちこちには、新入講者を囲んで、担当の地区役員や幹事が座をつくり、なごやかなひとときがもたれていた。

新入講者紹介

地区	氏名
槻木	伊藤悦次(西淀川区)
服部	遠藤茂(淀川区)
緑丘	多田信也(豊中市)
箕面	諏訪園慶子(豊中市)
高槻	足立幸造(高槻市)

以上、五名の方が新しく入講されました。おめでとうございます。

第七回修復委員会開催

四月二十七日(土) 午後四時

修復工事も最後の追い込み段階に入り、落慶法要を控えてこの日、最終確認と打ち合わせが行われた。山門工事が若干遅れぎみのため、会計報告は後日決済とし、法要に関する議題が話し合われた。あとは修復法要を心待ちにしつつ、一年間にわたる修復委員会を振り返り、住職より委員に謝辞が述べられた。

立宗会 奉修

四月二十八日(日)午後二時

今年には桜の開花時期から、急に花冷えの陽気となり、冬に逆戻りしたかのように、四月の降雪を記録した。そのため例年になく長い期日、お花見を楽しめたが、さすがに数日前から、暖かい日がよみがえり、この日の気温はぐんぐんと上昇した。

今年も御虫払い法要は、境内周辺の修復工事のため、昨年が続いて中止となり、立宗会の法要と法華経講義が行われた。

石井清文氏の油絵展

於 池田ギャラリー

四月十八日(月)からの石井さんの個展は、阪急池田駅の改札を出て、宝塚方面に歩を進めると、ショーウィンドウに飾られた二百号の油絵が、通る人の目をひきつける。富士山五合目から見た雲海に太陽の輝く風景で、幽玄な神々しさの中に、作者のあたたかみを感じる絵である。作品は、北海道から沖縄までの空、海、湖を中心とした風景画で、「若い



個展会場にて

時には空など気にしませんでした。年をとると、妙に空の景色が気になるもんです」と話す、石井氏の言葉が耳に残る展示会であった。

幹事会 ニュース

- ・ご住職も快癒され、継続審議中の、
- ・第二十六回源立寺法華講総会・修復落慶法要
- ・第二十回法華講全国大会・房総研修旅行の確認と審議をいたしました。
- 一、婦人部研修会について
- 婦人部研修会を、六月二十六日(日)大蓮

寺にて行いますが、ご住職または執事も同行されます。

未だ残席もありますのでご希望の方はお申し込み下さい。

二、南近畿地区一日研修会について

来る十一月二十四日(日)、大阪森ノ宮のアピオ大阪で実施されます。

源立寺の参加者は、四十七名と決まりました。

青年部 比叡山見学

四月二十九日(月)の祝日、源立寺青年部主催の、比叡山研修が行われた。



延暦寺戒壇院の前で

五月後半の行事

十三日(月) 午後一時 お講

二十六日(日) 午後一時 法華講全国大会

(日比谷公会堂)
二十七日・二十八日 房州聖跡研修旅行

今月の宅お講

十八日(土) 午後七時 庄内地区(野間孝宅)

二十二日(水) 午後七時半 緑丘地区(多田廉宅)

※宅お講の申し込みは、源立寺までお願いします。
締め切りは、毎月二十日です。

◎全国大会並に研修旅行について

大会並びに旅行参加者は、四月二十六日(日)午前九時新大阪発ひかり二二三号にて出発します。午前八時四十五分までに新大阪駅中央改札口に集合して下さい。個人参加者もなるべく上記列車をご利用下さい。また直接会場に行かれる方は、日比谷公会堂正面玄関にて源立寺の旗をもって山本副講頭がおりますので入場券の配布をうけてください。

◎法華講会計より

四月三十日は前期の講費納入日にあたっており、自動払いの方は引き落とししましたので通帳をご確認下さい。残高不足により、自動引き落としができなかった方には別途通知いたしますので、五月二十四日までに通帳に御入金下さい。

なお、振り替え用紙使用の方には、遅延なきようお願いいたします。講費滞納が重なりますと規則により除籍となりますのでご注意ください。

恵日

平成八年五月号 通巻十五号
平成八年五月十二日発行

編集兼
発行人

菅野 憲道

発行

恵日編集室

〒五六三 池田市槻木町一〇〇 源立寺内

TEL(〇七二七)五一一三三三五

購読料 定価一〇〇円(〒別)